



第2の故郷、徳島

留学生
滞在記

大学院創成科学研究科 理工学専攻 1年

NUR FATIHAH BINTI ROSLI

(ヌル ファティハ ビンティ ロスリ) [マレーシア]



長野旅行 (筆者:左端)



徳島中央公園で花見(筆者:左から4人目)



鳴門で大谷焼体験
(筆者:右側)

幼いころからの留学への憧れに加え、日本のアニメや音楽にも興味がありました。それがきっかけで、日本への留学を決意しました。高校卒業後、母国での予備校で2年ほど日本語を勉強し、5年前に徳島へ来ました。徳島に来た当初は、周りの人たちとのコミュニケーションに困りました。多くの人が阿波弁や関西弁で話し、教室や教科書で習ったとは異なっていたため、理解できなかったからです。しかし、今ではもう無意識に方言を使っています。

日本へ来る前は知らない土地に行く不安を感じていました。でも、実際に来てみたら、先生方や同級

生がとても仲良くしてくれ、一生の友も作ることができて、新しい故郷を得たような気持ちになりました。2017年に阿南高専に入学したときもそうでしたが、今年4月に徳島大学大学院に入学したときも、研究室で同じように感じました。研究室のメンバーと一緒にゲームをしたり、通話チャットで世間話をしたりして、研究室の外でも繋がる絆が生まれました。どこにいても歓迎されているようで居心地がいいです。

この優しい出会いは大学に限らず、様々な場面で感じました。国際交流イベントで出会った方々、公園や駅で声をかけてくれた人々

ち、いきつけの店でいつもの注文を覚えてくれた店員さん、みんな私に親切にしてくれて、故郷を思い出させてくれました。私はマレーシアの西北にあるケダ州出身です。のんびりした田舎で、人々は誰とでもフレンドリーに接してくれます。この雰囲気は徳島に似ているためか、思った以上に徳島での暮らしに溶け込むことができました。

そうとはいえ、今でも慣れない日本の文化もあります。特に季節に対する意識やこだわりです。春の桜の花見、夏の蝉の鳴き声、秋の秋鮭など、日本にはそれぞれの季節のイメージがあります。春

夏秋冬のないマレーシアでは「季節感」が存在しないので、季節ごとにイベントがある日本は「異文化」です。5年過ごしてきても、私には「夏は暑い、それ以外は寒い」という季節の印象しかありません。

勉学の場面でも苦勞しています。外国語である日本語で行われる専門用語の多い難解な講義では、人一倍学習が必要です。徳島大学では留学生のために講義資料を英訳してくださる教授もいらっしゃり、講義中でも内容についていくことができ、本心に助かっています。私は情報工学を専門としており、自然言語処理の研究をしています。以前から人間が使う言葉が難しいと思っていましたが、日本語の「丁寧語」や「尊敬語」を知って、ますますそれを実感するようになりました。私はこの問題を情報技術で解決しようと研究を始めました。

大学院修了後は、帰国して日本で得た知識を母国の経済や社会発展のために活かしたいと考えています。そして、国際交流活動を続け、マレーシアと日本の架け橋として活躍したいです。